

これからの継承を考えるワーキンググループ・ミーティング

テーマ : 被爆者たちの原爆とのたたかいと子どもたちの未来

報告2 「被爆者の声から学ぶ～その可能性と課題～」

佐々木孝夫 (元中学校社会科教師)

1 「田中熙巳さんに学ぶ～継承のための学習会」を開催して

昨年 11 月 8 日、埼玉大学で学生主催 (田中熙巳さんから被爆証言を学ぶ埼玉大生の会) の自主学習会「田中熙巳さんに学ぶ～継承のための学習会」を開催。主催した 6 名の学生たちは、3 回の事前学習や田中さんへの訪問なども実施。また、自主学習会用のチラシを手作りして大学の許可を取って学内に掲示。学生それぞれが受講している講義で担当教員の許可を得てチラシ配布や参加の呼びかけを行なった。インスタで情報発信し、QRコードから学生の参加を受付。参加者から送信された 51 の質問を整理して事前に田中さんへ渡した。学生などの申し込みは 140 名を超え、当日を待たずに参加を締め切った。

当日は、田中さんの講演 (70 分)、感想共有と全体への表明 (20 分)、休憩 (10 分)、継承についての話し合いと全体での質疑応答 (20 分)、田中さんから (10 分)、感想記入 (10 分) の内容。

- ①学生たちが主催者となって自主学習会を行なうことに、どんな意味があるのか。→
- ②被爆者の体験や思いを聞いて、非体験者は何を思い考えるのだろうか。→ 可能性
- ③被爆者たちの原爆とのたたかいと子どもたちの未来を考えるために、何が必要だろうか。→ 課題

(1) 学生たちが主催者となって自主学習会を行なうことに、どんな意味があるのか。

○ 主催した学生たちの感想

「いま直接被爆者から話を聞くことができることの貴重さを自覚することと、非戦争経験者として少しでも多数の多様な立場の人の心に響く継承するにはどうしたら良いのかを考えることが必要だと思いました。また、話し合うことの大切さを最後に話していただきましたが、戦争の話題であるかや、その規模の大小には関係なく、「トラブルは話し合いで解決させる。権力や物理的攻撃をもって無理やり結論を出すことはしない」という意識を当たり前にしていくことが、地道ではありますが、「戦争をしないことは当たり前」という戦争をさせない力になっていくのではないかと思います。戦争はせず、平和を目指しましょうと訴えかけるだけでなく、そのために私たちはどうすべきなのかというところまで一緒に考えましょうという意識で継承に携わっていきたいです。参加してくれた方々は、自分が思っていたより、戦争や平和について重く捉え、自分ごととして考えていること、悲惨な過去にも目を背けず向き合おうとする姿勢をもっていることに気付かされました。当日会場いっぱいに参加者が募り活発に話し合う姿を見られてとてもうれしかったです。そのような方々が身近にいるのなら、それぞれが内にもつ戦争や平和への思いや意見を共有して外に出す場 (今回の学習会のような) は、自分にとってもすごく刺激的で学びになるし、とても有意義なものになるなど実感しました。

学習会の運営に携わるなんて自分にできるとは思っていませんでしたが、不慣れなりにも行動してみることが必要だと、今回の経験をもって実感できました。大学生活でも先生になってからでも今回のように自分が行動をするということをまたしてみたいと思います。」

「わたし自身、いろいろな学習会に参加してきましたが、まさか自分が企画する側になるとは思っていませんでした。今回、このような貴重な機会を提案してくださった佐々木先生、そしてメンバーのみんなには感謝してもしきれません。正直、企画を始めた当初は、学生はこのような話題にはあまり興味がないから人数が集まらないのではないかと考えていました。しかし、実際、広報を始めていくと会場いっぱいになるほどの申し込みがあり、口に出さないだけで興味を持ってきている学生というのは多いのだと感じました。だからこそ、今回の会が自分の考えと向き合い、これからを考えるきっかけになっていたら嬉しいなと思います。被爆体験者だけでなく、戦争体験者の方々も少なくなってきたおり、わたしたちが直接証言を聞くことができる最後の世代になると思います。以前、服部道子さんのお話をうかがったときに「戦争の話をしたくてしている人はいないよ。聞いてくれる人がいるから話しているんだ」とおっしゃっていたことが印象に残っています。わたしたちには戦争体験者の方々から証言を引き出す責任があるのだと思いました。田中さんも上尾での学習会のときと比べても現在の日本政府の方針や世界情勢に危機感を持っているように感じました。その気持ちを田中さんの言葉でつたえてくださったということを忘れずに、次は自分が自分の言葉でその思いをつないでいこうと思います」

「田中さんは、『行動に移さなければならない』とおっしゃっていました。私たちは、国の決定が間接的にでも自分の意見であることを自覚していないのだとわかりました。国会は、民意の総決する場であるはずです。国というかけ離れた遠い存在が自分の暮らす世界を決めていると傍観するのではなく、自らが国家の形成者である自覚が今こそ必要であると感じました。思ったことを発しないと変わらない。難しいですが、その道があることすら見えていなかった私には大きな前進でした」

- 自分が行動することで、見えてきたり感じたり考えが深まったりしてくるのではないかな。
- そして、また自らが何らかの行動をする、声を上げることに繋がっていくのではないかな。

また、大学の授業（教職入門）で「赤い背中の少年・谷口稜暉さん」を学んだ学生の中に、次のようなコメントを書いたものがある。

「原爆については、何度か小・中学校で授業があり学んでいたつもりだったが、被爆者の実際の苦しみをここまで知ったのは初めてだった。目を逸らしたくなるほど残酷なものだったが、目を逸らさずに向き合うことで核問題についての意識が格段に深まった。被爆者の谷口さんが『生きることは苦しみに耐えることだ』と言いながらも核廃絶のために体験した現実を伝えていったこと、それを子どもたちに教育していくことは、私たちに当事者意識を与え、核問題について自分ごととして考えるきっかけになると思う。そうした私たち一人ひとりの思いや行動の積み重ねが、核根絶を実現させるのだと思った」

- つまり、自分が主体者となって学習会を企画運営したり、教師となって子どもたちにどう伝えていくか考え授業を行ったりしていくことで、原爆や核問題を自分ごととして考えていく入口に立つことになるのではないかな。そして、そのような活動、取り組み、行動を続けていくことで、やがて被爆者のたたかひの意義に気づいていくのではないかな。

(2) 被爆者の体験や思いを聞いて、非体験者は何を思い考えるのだろうか。

1 被曝体験を直接聞くことの重さ

- ・ 教科書の「文字で書かれた実感の湧かないもの」ではなく、経験から来る1つ1つの言葉が重みを持っていることを実感した。学校教育では私たちは教えられているばかりなため、その内容を自分の頭で考えることなく受け入れてしまっていると痛感した。
- ・ 原爆投下直後の様子が現実的に感じられる貴重な経験となった。今までは教科書の中、物語の中にあった戦争が、より一層身近に感じた。
- ・ 実際に経験したことを聞いて、教科書の中で見ていたことが「実際にあったことなんだ」と、より具体的に捉えられるようになった。
- ・ 被爆者から始めて話を聞いて、改めて「戦争は絶対に起こしてはいけない」「核を認めてはいけない」との思いが強くなりました。
- ・ 被爆者本人からの話は初めてだったので、力のこもった言葉に今までで一番強く戦争を身近に感じた。核兵器と平和は結びつかないのだとはっきり気づかされた。
- ・ 被曝体験者からリアルなお話を聞いたことは、人生の宝だと思った。「核を持たずに国を守る」のは、理想論だと思った。だが、その理想論を人々の間で話し続けることが大切なのだと思った。経験のない私たちこそが動かなければならないと強く思った。「話す力」で、核なんかよりもっと強い力で、日本や世界を守っていきたい。
- ・ 自分の居場所がなくなれば私なら悲しいので、田中さんも話すのも大変でつらかったと思いますが、私たちのために話してくれてありがとうございます。(小学生)

2 継承

- ・ 自分の無知さを実感しました。「受けとめきれない」と思いました。「受けとめきれない自分」が、目の前の子どもたちに何を継承できるのかと思った。事実をただ伝えることは、継承とは言えないと思います。
- ・ 平和への活動や考え方は、「過去を知ること」がメインなのではなく、「それを踏まえて、今私はどう生きるか」が大事であると痛感した。今の政治に対しても大衆迎合主義にのまれることなく、確かに見つめて考えて、話し合っていきたいです。
- ・ ノーベル平和賞授与の意図が、未来の若者たちに新しい活動を創ってほしいとの願いが込められていると知り、今以上に戦争と平和について考えたいと思った。
- ・ 伝えていく、継承していく、そのために何が必要なのか、考え実践していく職業の1つに教師、特に社会科、公民科の教師であると思いました。
- ・ 私は理系ですが、昔の写真の再生技術の向上、核の威力についての研究などは、理系だからこそできる継承への関わり方ではと思いました。
- ・ 小さい頃から平和学習をすることは、原爆についての理解を深め、自分にできることは何かを考えることができる。これを続けていくことが継承なのではないかと感じた。

- ・ 戦争に関する学習はどこか他人事、機械的になりがちだが、感情にも働きかけるような継承をしていきたいと思った。
- ・ 自分が戦時下の学生であったらどんな気持ちになったかを、どう伝えていけるか考えたい。
- ・ 「継承」に、原爆の悲惨さを知り戦争をしてはならないと伝えることも重要ですが、日本が中国や韓国に対して行なった加害の歴史も事実として伝えていくべきだと感じました。

3 自分にできること

- ・ 私にできることは、他者と共に対話を通じて自分の考えを紡いでいくことのできる子どもを育てること。事実を前にして、自分がどう変容したのかを見つめることができる子どもを育てたい。
- ・ 田中さんは過去を生きるのではなく、過去を踏まえて未来を生きる強い方だと思った。行動に移している姿を尊敬します。教師となったら、口先ではなく行動に移す、その姿を生徒に見せて伝えて、対話や行動が活発な学級を作っていきたい。
- ・ 教員として、「平和とは何か」「戦争はなぜいけないのか」「どう伝えられるか」等の不安があって参加した。教室の中で自由に意見表明できる、他者の考えを受けてさらに考える、それが仲間づくり、平和な空間づくりになっていると、活動を通して子どもたちに学んでもらいたい。
- ・ 生徒に今日の話伝え、生徒に考える機会、話し合う機会を作っていくことが私の役目だと思う。一人ひとりの言葉の発信が平和を創ると思って行動していきたい。
- ・ 自分ができることは漠然としていましたが、「話し合い」を日頃からしていくことが、戦争を交渉に変えるための第一歩だと思い、実践していきます。
- ・ 原爆が「歴史としての知識」だったものが、私たちの行動で変化するものであることを強く感じた。まずは、選挙による政治的意思表明をしっかり行いたい。
- ・ 安倍政権以来、憲法9条を変え戦力を持つようとしている政府を私たち国民は許してしまっているという現状の体制を変えるべく、声を上げること、そして仲間を作って戦争に対抗すること、これからやっていきたいです。

4 核抑止について

- ・ いま既に核兵器を持っている国があるが、「自国を守る」ために、脅す道具として多くの国が所有し始めている現状を怖いと思った。だが、国際間の関係で「核兵器をみんなで捨てるのが難しい」ため、戦争のない核兵器のない世界を望むが、「どうしたらいいのだろう」と思ってしまう。
- ・ 日本は被爆国なのに「核に守られている」矛盾に対して、日本のリーダーたちは他国から日本を守るためにアメリカの核の保証に入るしかなく、難しい問題だと思った。
- ・ 日本が核禁条約に参加するのは難しい。核保有国が核を手放さない現状でアメリカに守ってもらわないといけないから。核禁に参加すればアメリカを批判することになる。
- ・ 核兵器がなくならないのは、武力以外の話し合いによる解決の成功体験が無いからだと思う。戦争を否定しているだけではきれいごと過ぎない。ダメなのはわかるが、どうしたらいいのかわからない状態だと思う。田中さんの、「話し合いで解決する強い意志が必要」が大切だと思った。

- ・ 「核の抑止力に頼る、被爆国・日本」というのはどうなのか、私も疑問に感じていた。子どものケンカであれば、そのような脅しをしていたらその対象ごと没収して捨てることができるのにと、歯がゆく思う。どうしていくべきか、我々は考え続けなければならない。
- ・ 日本は「核兵器の禁止」を訴えているはずなのに、アメリカの核の傘に隠れている状況にあるので、「核抑止力」とは何かについて今一度考え直すべきだ。
- ・ 核の抑止力については、それを持つ側の加害性の現れなのだと思います。他者を加害したい者は、他者の加害性も信じて疑わないのだろう。
- ・ 「核抑止」について田中さんが話した通り、私たちには「どうせ使わないだろうという意識があるのだ」という言葉にはっとした。
- ・ 核を「抑止力」として用いている今の危険な状況を、知らない人が多すぎると思った。「使ってはならないものを使うぞと言うことは、脅し」と田中さんは話したが、その通りと思った。人に対して「殺すぞ」と言っていることと同じだと思う。
- ・ アメリカの核で日本が守られているのは仕方がないのではなく、「絶対に核兵器で国を守ってはいけない」「絶対に戦争をしてはいけない」と思います。
- ・ 最低限の軍隊は安心できる生活の維持に必要なだと考えていましたが、自衛の軍隊がどんどん変わっていき、攻撃のための軍隊となる恐れがあるため、全ての軍隊を放棄すべきだと考え直しました。

5 被爆者運動

- ・ 被爆者の戦後の取り組みの話は、初めて知ることが多かった。
- ・ 戦争の悲惨さ、日本被団協の道のりなど、多くを知ることができました。
- ・ 戦後の市民の生活や政府の対応を初めて知りました。戦後は日本も経済力がなく、立て直しと支援を同時に行うのは難しく、辛い思いをされたのだと思う。政府に被爆者支援が全く頭になかったかどうか分からない。
- ・ 自分が知らないことがたくさんあった。特に、日本政府の対応で戦後に被爆者のことを考えていなかったことは衝撃でした。もっと、戦後の生活の話聞いてみたい。
- ・ 話を聞いた私たちこそ、被爆者の取り組みを無駄にしないよう行動を起こし、話し合う機会を持つようにしていきたいです。

6 対話・話し合いの大切さ

- ・ 若い世代でも直接対話しながら広げることの大切さ、田中さんが伝えた一番大切な事だと思った。
- ・ 日頃の人間関係と話し合える環境を築く必要があるが、今は表面上の付き合いが多い。衝突を恐れて、人間関係が希薄になっている。学校教育では対話のできる人間関係の構築にもっと力を入れるべきだ。
- ・ 私も誰かとの衝突や批判を恐れて、自分の本当の気持ちを言えないことがある。もっともっと本気の話し合いをして、相手のこと、自分のことを知っていききたい。
- ・ 本音を隠して強調することを良しとしてしまいがちな私ですが、本当の自分の意見を言っていこうと強く思いました。
- ・ 大学に入ってから周りに合わせようとする反面、自分の心の内を隠すように過ごしてきた現代人の典型です。「本音で話すことは平和につながる」と自覚して話す機会を持つようにしていきます。

- ・ 「話し合うことの大切さ」を感じました。知って終わりではなく、自分の考えや相手の考えを理解し合えるように「対話」することが大切だと思いました。
- ・ 周りの人との話し合いを通して世界で起きていることへの考えを深め、自分の意見や考えを持つるようになっていきたい。
- ・ 国同士が衝突するのは当然のこと。その問題をどう解決するかが共存にかかわる。交渉か武力か。武力では共存できない。だから、武力ではなく交渉、つまり対話をもって問題に立ち向かわなければならぬと改めて思った。
- ・ 核の排除、戦争を起こさないこと、そのためには議論によって問題解決することが重要であると感じた。
- ・ 憲法改正や軍事費について、自分とは違う意見もあったが、普段の生活（特に SNS 上）では同じ意見の人しか話さないの、その危うさに気がついた。
- ・ 違う環境で育ったり教育を受けたりすると、考えのすれ違いは出てくると思います。間違えた部分は認め、嫌な部分は話し合っ解決する世界になってほしいと心から願う学習会になりました。
- ・ すごく良い学習機会を与えていただき、ありがとうございました。日本で「攻撃されるのでは？」「変人だと思われるのではないか」と、怖がってなかなか言えなかったことを言えることができ、本当に良かったです。これからも、このような学習会に参加させていただきたい。(中国人留学生)

(3) 被爆者たちの原爆とのたたかいと子どもたちの未来を考えるために、何が必要だろうか。

講演会でも、授業でもそうなのだが、「被爆者たちの原爆とのたたかい」に焦点を当てたものになかなかない。参加者、学習者の理解や学びになるには、どうすればいいのか。

→ ①「被爆体験を語ることは大変なことなのに、被爆者たちはなぜ語るのか？」について、被爆者自らが自分の思いやこれまでの行動について語ったり、「なぜ語るのか？」という問いについて学習者同士が話し合ったりすることで、被爆者のたたかいが見えてくるのではないか。

→ 田中さんのお話を聞いた小学生の感想

「自分の居場所がなくなれば私なら悲しいので、田中さんも話すのも大変でつらかったと思いますが、私たちのために話してくれてありがとうございました。」ここから、それでもなぜ田中さんは語ってくれたのだろうか？と、問いたい。

→ ②「赤い背中の谷口稜暉さん」の授業では、最後に「谷口さんの行動した意味・意義はどこにあるのだろうか？」という問いを用意して、被爆者のたたかいが果たしてきた功績について、戦争をさせず、核兵器を使わせない日本の平和国家としての歩みを守ってきたことを、話し合い、共有していくことはできないか。

→ さらに、大学の授業での学生のコメントを紹介します。

「被爆者の体験記などは、小学生の頃から読む機会が多かったのですが、昔に比べて鮮明に想像し辛い気持ちになることが増えました。小学生では『はだしのゲン』を読み、高校では原爆ドー

ムへも行きました。あの頃、どこかフィクションだった話が、自分に大切な人や物が増えるほどに、現実味を帯びてきました。人は変わり続けるし、成長し続けるため、感じ方も変化していきます。たった一度しか学ばないのではなく、時間をかけて何度も何度も学ぶことが大切だと思います」

2 学校の教育現場でどう学びあうか

(1) 社会科、総合、特活、道徳などで、授業や体験活動を通してまなぶ。

(2) 方法

- ・証言者から直接被爆体験やそのたたかいを学ぶ
- ・証言集、紙芝居、絵画、映像、これらを組み合わせて学ぶ
- ・学びの中に、話し合いや意見交流など、自ら考えをまとめ他者の意見も聞く活動を取り入れる
- ・作品を作る→ 新聞にまとめる、絵画や映像にまとめる
- ・誰かに伝える→ クラスの仲間への発表会、学年の集会、後輩や社会での出前発表会

(3) 調べる活動のポイント→ 自らの問い（なぜ？）を大切にする。その例です。

- 1 被爆者とは誰なのですか。 2 被爆時の様子、どんなことが大変だったのですか。
- 3 被爆者は、どんなことに苦しんできましたか。 4 なぜ、アメリカを訴えていないのですか。
- 5 日本被団協は、何を目指しているのですか。
- 6 被爆者や日本被団協を知るには、どうすればいいですか。
- 7 被爆者はなぜ被害を訴えられなかったのですか。
- 8 被爆者は、どのようにして立ち上がったのですか。
- 9 1955年、第1回原水爆禁止世界大会とは、どんなものだったのですか。
- 10 1956年、日本被団協の結成までにどんなことがあったのですか。
- 11 1956年、第2回原水禁世界大会と日本被団協の結成は、どのように行われたのですか。
- 12 「まどうてくれ」とは、どんな意味で何を求めてきたのですか。
- 13 被爆者運動最大の危機は、どんなことでしたか。
- 14 被団協は、どのように被爆者運動を再生していったのですか。
- 15 日本政府は、被爆者の願いや要求を叶えたのですか。
- 16 国の基本懇答申の「受忍論」に対して、被爆者はどうしたのですか。
- 17 1984年に制定された「原爆被害者の基本要請」とは、どのようなものですか。
- 18 原爆被害者援護法は、制定されたのですか。
- 19 被爆者が自らの被爆体験を語ることは、大変なことではありませんでしたか。
- 20 日本被団協の知名度は、なぜ低かったのですか。
- 21 私たちは、「継承者」になれますか。
- 22 被団協がおこなった、原爆被害者調査とは何ですか。
- 23 被爆者は、みな苦しみの中で生きてきたのですか。（被爆者像をどうとらえるか）
- 24 被爆者の声を、どのように世界に訴えてきたのですか。
- 25 日本被団協がノーベル平和賞を受賞した理由は、どんなことですか。
- 26 核抑止力をどのように考えていますか。